

か狼狽する。父母は幼少に死別、自分の帰る所がない。取り敢えず「北海道だ」妹は不安な顔でうなづく、複雑な思いだった。

真岡到着後、樺太出身者の残留希望者受付が始まった。駅での淋しげな妹の顔が浮かぶ。肉親の情は離れがたく残留組を志望。

戦友の帰国を見送ることも出来ず、港の倉庫へ、数日後王子製紙の幕舎に移されて工場の作業。

騙された忿懣やる方ない、戦友と帰国すべきだった。収容所に戻され、港湾労働だ。ドングロースにはいつたむぎ粉重量九十キロ、実働十二時間、体はバラバラだ。五月豊原に移され製材所の丸太搬入、一か月後内測炭鉱に移る。まるで渡り鳥だ。

コライト積み込み作業、日夜の区別がない。夏冬上半身裸だ。寒くても零下二十度前後、北樺太から比べたら楽なものだった。

十月に入り大隊に復帰する。夕食より白米の食事だ。新品の下着、軍服、軍靴が支給され、帰国命令が出た。

真岡収容所で過去を忍ぶ、長い日々であった。終戦、

捕虜、北樺太、真岡、豊原、内測、幾多の中隊をめぐり、多数の戦友とも別れ、三年四か月の捕虜の終止符だ。

私達は、青春を損失し、苦しい数々の思い出ばかり、人との厚い友情が心の中に湧いてくる。苦しさを通って来た心の高まりだ。耐えて生きて来たのだ。

船上より真岡、というより樺太を見る。二度と踏むことのない我が故郷、私を二十三年真育ててくれた島よ。雲仙丸は白い航跡を残し、一路北海道を目指す。

私達の前途には未知の人生が、始まろうとしている、甘い考えはゆるされない。函館 祖国だ。昭和二十三年十一月祖国

敗戦後の空襲

北海道 三上敏子

私にとっての戦争は、終戦の日より始まりました。

私達は、終戦後、北海道に引揚げることとなり、十六歳以上、六十歳未満の男性を残し、女と子供だけで、貨

車に乗り、口では言い表せない、大変な思いの出発でした。国鉄勤務の方々は、大泊まで行き、私達は、豊原の駅におろされました。今にして思えば、あれは、引揚げでなく、逃亡だったようで、暑い日でした。八月二十四日です。

皆つかれた身を休ませていたとき、頭上に、銀色に光るものが、四ツ落下して来ました。そのうち、誰か大声で、敵機来襲と大声でさげびました。怒濤のように、駅舎の中へ、あるいは近くの建物の中へとなだれ込みました。私達は、幸い駅舎に近かったのです。

当時私は、二歳の弟の面倒をみており、気がついたときには、私のそばで泣いておりました。母は三歳の弟を、便所につれて行っておりました。機銃が豆をほおり投げするように、コンクリートの広場は、白い土けむりを上げていました。兄はまだ荷物を背負ったままでおりましたので、荷物を捨て、その紐で、兄が弟を背負い、五歳になる弟の手を引いて、大勢の大人達と、防空壕にはいたり、飛行機が遠のいたらまた歩き、学校に収容されました。

三日後に母に逢えました。やはり屋根のない貨車で、私達はソ連軍の命令で自分の家に復帰することになりましたが、かなりの、人が帰ってきませんでした。父は造材関係の仕事を、しておりましたが、終戦後は国鉄にはいりました。西海岸の、泊居、久春内間の谷間に列車を引上げるために出張しました。行ったまま、便りなし、送金なしで母はかなり心配だったようです。母と兄が山で、イタドリを取って来て、バザールで私が売るので、それで生活をして参りました。

六キロの道を、イタドリを背負い、知取りまで行くのです。私一人を残して、母と兄は帰ります。私は一人で、売り切れるまでがんばって、又六キロの道を歩いて帰るのです。心細かった。小学三年生の私は、標準より小さい子供でしたから、ソ連の人達に可愛がられました。バザールの売り子は大人ばかりでした。韓国人、ソ連の人、日本の人はとても少なかった。まして子供は私一人のようでした。それも夏だけです。

三年くらいは働いたかな……

母はいつも、皆んなで一緒に死のう、と言っておりま

した。私はいつも一番に賛成したものです。でも兄だけは反対しました。僕一人でも生きる。父さん帰って来たとき、皆んな死んでしまったら父さん泣くからと言うのです。

二十三年十一月六日の引揚げ命令が、やっと出ました。母と兄が荷造り、私は弟達の面倒、父は出発ギリギリに帰って来ました。遠古丹の小さな村に、たった二軒だけの日本人で最後の引揚げ船でした。

父の出張の間、兄は長男として、一生懸命にがんばりました。でも翌年二十四年十二月これからというときに、兄は十五歳で亡くなりました。一人になっても生きると言っていた兄なのに……。

※これは母が書くことなのですが、八歳の私を感じた戦争を書いてみました。

少年時代の終戦に思う

北海道 河合昌一

忘れもしない昭和二十年二月少年飛行兵の一次試験に学科体格検査に合格して、二次試験を受験のため東京へ入隊通知があり豊原連隊区司令部に集合、全島から八人が憲兵曹長に引率されて東京へ向かった。思えば十七歳の冬であった。当時は「よしこれでお国のために立派に戦死が出来る」と思い、父もまた姉弟ばかりで国のためにも出来なかったが、これでやっと世間に顔向けが出来ると喜んだものであった。

入隊二日目から操縦・通信・整備の三部門に別れるための精密検査の結果は無残にも胸部疾患即日帰郷という冷たい軍医命令であった。私にしてみれば胸をわずらう病などで、病院の世話になったおぼえもなく、一次試験のときも異状なくと残念でならず、駅頭で日の丸を振って大勢の人達が見送ってくれた方々に逢わず顔もないと